ハナとタマシヒ

平山千代子

青空文庫

ハナ

いつごろだつたのか、誰であつたか、多分、渡辺千代子さんだつたと思ふが、私をそつと手招きして、校庭のすみへつれて行つた。そして小さな声で、

「あのね、ハナツて、何んだか知つてる?」

「ハナ?　ハナツて……この鼻?」と私は鼻を指先で叩いてみせた。

「うん、出てくる鼻汁(はな)よ」

「うゝうん、知らない」と首をふると、

「あのね、ハナはノーミソの腐つたものなんですつてさ……」千代ちやんは大げさに、まるくて茶色いその眼を、一層まるくしてさう教へてくれた。

「ふうん?　さうお?」と私は云ふ。

真面目になつて教へる方も教へる方だが、「ふうん」と感心してきいてる者もきいてる者だ。が、だから面白い。ノーミソツて云ふのは、頭のこのオデコから上に這入つてゐる、大事なものだとは私は知つてゐた。してみれば鼻とは甚だ近いんだから、ほんとなんだらうとも思へる。

きつと、ノーミソは、あんまり沢山のことを覚えるんで満員になるんだな。だから古いのがハナになつて出ちやつて、後から新しいノーミソが代るんだらう。忘れるツてのはノーミソが

腐つちやふんだな。ははあ、そして外へ行つちやふから思ひ出せないのか、はあーんナルペソ。私はさう判断して一人で感心してゐた。

しかし、妙なところもある。ウーンマテヨ、けど風邪をひくとなぜノーミソが沢山くさるんだろ。そいから、よく勉強するとノーミソを沢山使ふんだから、ハナも沢山出ておぼえる代りに忘れるのも多くなりさうなもんだ。だのによく勉強すると頭がよくなつて、物おぼえがます〳〵よくなる。……変だな。青ッパナは、たしかにノーミソの腐つたのにみえるが、ぢやあ水ッパナの方は何なんだろ。……

いよ〳〵不思議な気がしないではなかつたが、訊ねようにも何だかキタナイことを云ふ様で、そのまゝ半分は信じてもちこしてしまつた。

女学校へ這入つた年だつたと思ふ。何かの話のついでから……いゝや誰かハナをかんだので、私が言ひ出したんだつたかな、たぶんさうだ。私はすました顔で、

「ハナッてのは、ノーミソが古くなつて腐つたんですつてさ」と云つた。と、途端に、「ワーツ！」と家中の人がお腹をかゝえて笑ひ出してしまつた。おかしいことには節ちやんも、小ッちやなヨーベーさへ大笑ひに笑ふのである。笑はないのはネコに私位のもの。

「アッハッハッハ。ノーミソが、アハ……くさつたんだなんて、アッハッハッハ、あー、くるしい」

「ワハハ……バカ！　そんなにノーミソが腐つてたまるかい、ワハハ……」

「おーくるしい、お腹がいたくなつちやひましたよ。ハッハッハ」

涙を浮べておかしがつてゐる。

「だつて、千代ちやんが教へてくれたのよ。渡辺千代子さんが……」と抗議を申し込んだが、あんまり皆が笑ふので、これは嘘だつたんだなと私もおかしくなつて笑ひながら、

「ぢやあ何なの、ノーミソが腐つたのでなきや、何なの？」きいたが、誰も笑ふばかりで教へてくれなかつた。

そして問題はノーミソの腐つたのではないといふことがわかつただけで、又も迷宮入りとなつてしまつた。

あれが多分小学校の三、四年のときだらうから、三、四、五、六、一、二、三、四と実に八年目に私は生理衛生で、鼻汁は鼻腔内粘液が空気の出入りなどでよごれたものなり、といふ事を知つた。「ハナは……」といふこの文句を本の中にみつけたとき、私はおかしくて〳〵笑ひが止らなかつた。骨の名前や血の循環なんかは忘れても、これだけは終生忘れないと思ふ。

タマシヒ

やつぱり三年位のときだつたんだらう。冬のある日、七、八人のお友達と校舎の板かべによ

つかゝつて日向ぼつこをしてゐた。私たちは遊びにあきると、よくさうやつて日向ぼつこをするのだ。

誰だつたか思ひ出せないが、そのとき急に眼をつぶつて、指で眼のはしを軽くおさへてグリ〳〵とまはす様なことをし始めた。変なことをしてるな、とみてゐると、急にそのお友達が、スットンキョウな声をあげて、

「あ、あゝ、みえる〳〵」といつた。そして向き直ると、「ね、かうやつてごらんなさい」と又グリ〳〵としてみせた。

私たちも眼をつぶつてやつてみた。別にどうもならない。

「なーに？　何が見えるの？」

「ほら〳〵、見えるぢやないの、黄色い輪が……」

「どこに？　見えやしないわ」

「うゝん。そら眼をつぶつたらね。つぶつたまんま、グリ〳〵してるのと反対の方へ横眼をつかふのよ。そして……グリ……グリグリ……ネ、見えたでしよ、黄色い輪が……ね」

「あゝ、あゝ、見えた、見えたわよ。グリ〳〵すると輪も廻るのね……あゝ、おもしろい」

「ね、見えたでしよ？　ね」とお友達は嬉しさうな声を出した。

私たちは眼がいたくなつてしまつて指をはなし、「いたくなつちやつた……」と眼をこすつた。眼をあけたらまぶしかつた。お友達はにこ〳〵しながら

「ねえ、今見えた黄色い輪ね。あれなんだか知つてる?」
得意さうに皆をみまはした。みんな、まぶしさうな眼をまだショボ〳〵させて、
「うゝ、うん」と一度に首をふる。
「あれはタマシヒなのよ」
「……?　……?」
皆驚いて眼と眼を見合はす。
「ふーん?　あれがタマシヒなの」と誰かゞ感に耐えない声を出した。それから一しきりタマシヒの話でにぎわつた。
「タマシヒつて眼ン中にあるもんなの?　輪になつてるのね。知らなかつたわ」
「人魂ツてのはあれが飛ぶの?」
「馬鹿ね。人魂なんて迷信よ」
「あら?　あるんですつてよ。家のおぢいさん見たツて云つてたわ」
その中に誰かゞ大きな声で、
「あら?　〇〇さん!」とタマシヒを教へてくれたお友達を引張ツて、
「変よ、右の眼でやつても左の眼でやつても見えるわよ。二つあるの?」ときた。
〇〇さんは悠然として、
「わかんない人ね、両方の眼の真中にあるのよ。だから、どつちでやつたつても、みえるんぢ

やないの……」私は感心して帰つて来た。そしてとき〳〵〳〵やつてみる。

夜、お床へ這入つてから、真ッ暗な中でグリ〳〵をやつた。真暗な中でもタマシヒは見えた。真暗ン中でも見えるんだから、こりや本当だな、私は固くさう信じてしまつた。ハナと一しよに。

「ハナはノーミソの腐つたもの」「タマシヒは眼と眼の真中にある黄色いまるい輪である」と思ひこんでゐた。ところがハナの方を公開したら、大笑ひに笑はれたので、すこぶる自信を失つて、タマシヒの方迄あやしくなつた。

この方はまだ公開してない。あの時のやうに又どうせ笑はれるんだらうと思つて言はなかつた。

今思ふからこそおかしいが、それでも時々眼をつぶつては、グリグリとやつて、昔を思ひ出してゐる。

青空文庫情報

底本：「みの　美しいものにならん」四季社
1954（昭和29）年3月30日初版発行
1954（昭和29）年4月15日再版発行
入力：鈴木厚司
校正：林 幸雄
2008年2月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ハナとタマシヒ

平山千代子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/